

聖書：マタイ 5：38～42

説教題：悪い者に手向かうな

日時：2018年6月3日（朝拝）

今、見ているのは山上の説教と呼ばれるイエス様の教えです。イエス様は5章20節で「あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません」と言われました。そして21節以降で、当時パリサイ人らによって旧約聖書の律法がどのように教えられていたかを示しながら、それと対比する形で、天の御国の民はどのように歩むべきかをお語りになっています。この箇所でもいつもの通り、まず当時どのように人々が教えられていたかが先に述べられます。38節：「『目には目を、歯には歯を』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。」この言葉はハムラビ法典に出て来る言葉として、小学校や中学校で私たちは学びましたが、聖書にも出て来ます。出エジプト記21章23～25節：「しかし、重大な傷害があれば、いのちにはいのちを、目には目を、歯には歯を、手には手を、足には足を、火傷には火傷を、傷には傷を、打ち傷には打ち傷をもって償わなければならない。」他にもレビ記、申命記にもこの言葉が出て来ます。ですから引用が間違っているわけではありません。しかしこの言葉の当時の理解には二つの問題があったことが、この後のイエス様のことばから伺えます。一つはこの規定は公的な裁判に関わる規定なのに、人々は私的な復讐をする際の原理・原則として読んでいたということです。聖書はすべてのページで、個人の立場で、プライベートに誰かをさばき、手を下すことを禁じています。社会正義や平和を保つためには、神がそのために立てておられる公的な立場の人たちがいます。それを無視して、個人個人が勝手にさばきを行ったら社会全体は恐ろしいことになってしまいます。そしてもう一つは、この規定は公的な裁判において正義が満足させられるための規定であって、やられた人は同じように相手にやり返して良いという権利を、やられた人に与えるためのものではないということです。私たちは誰かにひどいことをされたり、言われたりすると、その2倍、3倍にして返さないと気が済まないものです。少し前のテレビ番組では「倍返し」という言葉が流行りました。創世記に出て来るレメクも、私が受ける傷のためには一人の男を殺すと言い、カインに7倍の復讐があるなら、レメクには77倍と言いました。明らかにアンバランスです。そのような行き過ぎを抑制するという目的もそこにはありました。目には目、歯には歯。その関心は正義です。しかし人々はそういうことよりも、やられたらやり返す。目を取られたら相手の目も取ってやる。歯を取られたら、相手の歯も取ってやる。そのように恨みを晴らす

ための御言葉、しかも個人的にそうすることを許可し、承認し、奨励する言葉として理解しました。イエス様はそのことを問題にしておられます。39 節前半：「しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。」 「悪い者」とは、自分に悪を行って来る人のことです。私たちはそのような敵が現れると、その人に対抗し、応戦し、張り合おうとします。そしてもしひどいことをされたら、まさに「目には目を、歯には歯を」の原理で仕返ししてやりたい。しかしイエス様はそうしてはならないと言います。そのことを4つの具体例を挙げて説明して行きます。

まず一つ目は 39 節後半：「あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい。」 顔をたたかれること、特に平手打ちは大きな侮辱を相手に与えるものです。しばしば注解者たちが言うのは、右利きの人が普通に目の前の人を平手打ちしたら、相手の左側の頬をたたくことになるはずだということです。なのにここで右の頬を打たれると言われていることの意味は何か。それは反対側から右手の甲を使ってたたかれるということです。これはより侮辱的なたたき方だと言われます。その時、どうせよとイエス様は言っているのでしょうか。何ともう片方の頬も差し出ささいと言われます。

この箇所は色々な議論や反論がなされるところですので、いくつかのことを先に申し上げますと、イエス様はいつでもこのようになすがままにされよと言っているわけではありません。イエス様ご自身、大祭司の前で平手で打たれた時、反対の頬を差し出すことをしませんでした。打った役人に「わたしの言ったことが悪いのなら、悪いという証拠を示しなさい。正しいのなら、なぜ、わたしを打つのですか。」と抗議されました。ここから分かることは、イエス様は今日の箇所ですら正義を無視して良いと言っているのではないということです。悪いことをしている人に、あなたのしていることは悪いと言うことは大切なことであり、またすべきことです。ただイエス様が今日の箇所で言っているのは、そういう社会的な義云々の問題ではなく、個人的な復讐心の問題です。自分に不正や暴力が加えられた時に、やり返さずにいられない自我の問題です。イエス様は侮辱されたことから来る怒りや復讐心から先の言葉を語ったわけではありませんでした。それらからは全く自由な方として、ただ相手の不正を指摘されたのです。

またここから絶対非戦論や無抵抗主義を唱えるのも正しくありません。先にも述べましたように、社会的な正義や平和を保つために神によって立てられた人たちがいます。ローマ書 13 章にあるように、為政者や支配者は悪を処罰し、善をほめるために立てら

れています。その人たちには「剣の権能」が与えられています。イエス様はそのことまで否定しておられるのではありません。ですから私たちは正義のために必要なら裁判に訴えて良いのです。それは神が定めた制度です。しかしそうであってもここで禁じられていることは、私の心の中に相手への復讐心が満ちていること。私たちは個人としては右の頬を打たれた時、左の頬を向けるほどの心の用意を持っていなければならないと言われています。

二つ目の例は40節：「あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着も取らせなさい。」 下着を取ろうとするとは一体どういうことか。イエス様も随分へんなことを言うものだと思ある人は思うかもしれませんが、ここでの上着はオーバーコートのようなもののこと。そして下着とはその下に着る普通の服のことです。上着は生活必需品として、なくてはならないものとされていました。どんな訴訟になっても寒さから身を守る最後の着物として、これだけは相手から剥ぎ取ってはならない。それは相手が最後までキープできるものとされていました。しかしイエス様は中の服を取ろうとする者には上着も与えよと言うのです。そんなことをしたら私たちの生活はどうなってしまうのでしょうか。

三つ目の例は41節：「あなたに一ミリオン行くように強いる者がいれば、一緒に二ミリオン行きなさい。」 当時、占領された国の人々はローマ軍によってある仕事のために徴用されることがありました。これをあそこまで運べと言われたら、そうしなければなりません。イエス様の代わりに十字架を背負わされたクネレ人シモンもそうでした。突然、強制労働を命じられることは迷惑な話です。通常なら何と自分は運が悪いことか！と嘆き、不満と反発心が心から出てくるものです。しかしイエス様は1ミリオン行けと言われたら、その2倍を行け！と言われます。1ミリオンは欄外に約1500メートルとあります。ですから1500メートル運び終わったら、もう1500メートル行きましょうかという態度を取るようにと言われる。そうしたら相手の兵士はどんなにびっくりすることでしょうか。

そして四つ目は42節：「求める者には与えなさい。借りようとする者に背を向けてはいけません。」 これも常に文字通りにそうすべきルールとして語られているのではありません。もしそうであるなら、この礼拝が終わった後、誰かが「今日着ている服、素敵ですね。それ、私に下さい。」と言ったら大変なことになります。文字通り実行すべ

きなら、それをその人にあげなければなりません。それだけでなく、あなたの腕にはめている時計を下さい、あなたの自転車を下さい、さらにはあなたの家を下さい、財産全部下さいと言われたら、言われるままに全部そうしなければなりません。そういう非現実的なことをイエス様は命じておられるではありません。これも私たちの心の問題、自我の問題を扱っているものです。私たちはなるべく人に物をあげたくないし、貸したくもない。貸したまま自分から失われるリスクを負いたくない。そうして他人の必要に目をつぶる傾向があります。しかし本当に必要としている人には喜んで分け与えなさい。しぶらないで貸してあげなさい。自分の便宜よりも、他者の必要に目を向け、その必要を優先させなさいと言われているのです。

私たちはこのように聞いて悲鳴を上げたくなくなります。これでは私の生活はどうなってしまうのか。こんな聖書の箇所は早く閉じてしまいたい。もうこの話には耳をふさぎたい。そう思う人も多いのではないのでしょうか。なぜそうなのでしょう。それは私たちは自分が可愛いからです。自分中心だからです。その何が悪いのか。それは当然のことではないかと私たちは反論したくもなります。しかしイエス様はまさにそのこと、すなわち自分を否定すべきこと、自己否定についてここで語っておられるのです。いつも自分を一番にし、自分を優先する私たちに他者の益を先に持って来なさい、そしてあなたのことは2番目以降にいなさいと言われている。これは生まれながらの私たちが最も嫌う話。最も聞きたくない話なのです。

私たちはどうしたら良いのでしょうか。ただ心かき乱されてこの箇所を閉じるしかないのでしょうか。今日の箇所を読む私たちに光を与えてくれること、それはこの通りに歩まれた方がいることに私たちの目を向けることです。それは他ならぬイエス様ご自身です。イエス様は今日の御言葉を口で語っただけでなく、ご自身がその通りに歩まれました。イエス様は先に見ましたように、平手で打たれた時、相手の不正について問われた時がありましたが、福音書に満ちているのは打たれるままにされるのを良しとし、それを耐え忍ばれたお姿です。イザヤ書 50 章 6 節：「打つ者に背中を任せ、ひげを抜く者に頬を任せ、侮辱されても、唾をかけられても、顔を隠さなかった。」 イエス様は兵士たちに目隠しされ、頭を棒で叩かれ、誰が叩いたか当ててみろ！と言われました。またつばを吐きかけられ、こぶしで殴りつけられ、紫の衣を着せられて「王様バンザーイ」と弄ばれ、また脱がされました。頭には茨の冠をかぶらされました。そして上着も下着も剥ぎ取られて裸で十字架の上に上げられました。こういう扱いに対してイエス様はどう

対応されたでしょうか。1ペテロ2章22節からの部分に「キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず」とあります。イエス様はまさに今日の章でご自身が語った通りに生きられたのです。しかも私たちが思うべきは、そこにおられたのはまことの神なるお方であったということです。従って益々その方にふさわしくない恐るべき扱いがそこでなされていたことになる。イエス様は悪を行う者たちに対して、わたしこそすべてにまさってあがめられるべき者であり、あなたがたはわたしの前にひれ伏さなければならないと言ひ、従わない者は即刻滅ぼすこともできた方です。しかしイエス様はご自分の神としてのあり方を捨てられないとは考えず、すべての権利を脇に置いてへり下られました。そして十字架に上って尊いいのちさえも投げ出されました。イエス様は「求める者には与えなさい。借りようとする者に背を向けてはいけません。」と言われましたが、ご自身のいのちそのもの、その血の最後の一滴までも与えられたのです。それは誰のためでしょう。それは私たちのためです。神に反抗し、そのままでは滅びへ至る私たちのためです。すべての上にもまします神なるイエス様が、このようにご自分を主張せず、その権利を主張せず、私たちのために苦しみを耐えてくださったから、私たちには救いが与えられました。なのに私たちが自分の無きに等しいメンツにこだわって、そのために争うような生活をすべきでしょうか。そしてこのことは父なる神にも当てはまります。なぜ神はこんな私たちのために一人子まで差し出してくださったのでしょうか。ご自分の権利という観点から考えるならば何もここまでされる必要は全然なかった。しかし神は私たちを愛して、ご自分のことは後回しにされたのです。そして私たちの救いのためにかげがえのない尊い一人子さえも差し出してくださったのです。

この神とイエス様のお姿を見つめ、心から感謝してひれ伏す時、私たちもまた、この方にならい、この方を映し出す歩みに進むようにと導かれるのではないのでしょうか。私たちに悪を行なって来る人は確かに良い報いを受けるにふさわしくない人です。しかし考えてみれば私もそうだった。そのふさわしくない者のために神とキリストは侮辱を甘んじて受け、私のために仕えて下さいました。とするなら私たちも同じように他の人にする事によって神とキリストへの感謝を表すべきではないのでしょうか。

ですから私たちが誰かに悪をされた時、カーッととなって、直ちに仕返しを！と駆り立てられるのではなく、むしろこの時こそ私のイエス様への言い尽くせぬ感謝を効果的に表すためのチャンスが来た！ととらえるべきです。1ペテロ2章21節に「このために

こそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。」とあります。具体的にそこでのどのような行動を取るのが一番良いことなのか、良く考え、上から知恵を与えていただく必要はあると思います。しかし私たちは自分の復讐心を満足させるために相手に仕返しすることへ向かうのではない。自分のメンツを守るために相手に厳しく応戦するのではない。私たちはイエス様と神を仰いで、その姿にならうべきです。自分のことで頭が一杯になるのではなく、相手の真の益を考え、それを優先する歩みに進むべきです。神はこのようにして私たちをご自身に似る家族の歩みへと招いています。私たちがそのように歩む時、この世の価値観とは大いに異なる神の国の価値観、天国の価値観を世に示すこととなります。これがイエス様が私たちを招いておられるパリサイ人の義にまさる義の生活です。その生き方を通して、それを見る人々が天にいる私たちの父をあがめるように、そうして神の御国を神とともに広げる者となるようにと私たちは召されているのです。